

刀伊の入寇の背景や経過、その歴史的意義について、具体的に教えてください。

平 安時代の11世紀初頭、女真(刀伊)族の一派が対馬・壱岐そして北九州沿岸を襲った。藤原道長の頃のできごとである。「刀伊の入寇」と呼び慣わされているこの事件は、鎌倉時代のモンゴル襲来(元寇)以前にあって、わが国が体験した未曾有の異賊侵攻事件とされる。

近年の高等学校の日本史教科書には「刀伊の入寇」とは別に、「刀伊の来襲」あるいは「刀伊事件」と表記されているものも少なくない。「入寇」の語感にはモンゴル襲来を、江戸期の水戸学などで「元寇」と称したように、対外意識のなかでの価値観が作用している。モンゴル襲来についての当時の史料では、「異国合戦」とのみ表現されている。その点では「刀伊の入寇」も同様で、近代国家の国防理念を前提とした価値観に由来した。この事件を記した『朝野群載』などの史料では、「異賊」の表記が一般的とされる。

こうした点をふまえつつ、以下では、この刀伊事件について、その背景、経過、そして結果、およびその歴史的意義に簡略に触れておきたい。

事件の背景

10世紀はわが国にとって、外交上の大きな転換期だった。この時期、東アジア世界は大きく変貌する。「刀伊の入寇」の背景をなすものは、大唐帝国(618～907年)の滅亡にともなう東アジア秩序の揺らぎが関係する。大陸と向き合う日本は、間接的ながら海を介してその影響をこうむった。その意味でもグローバルな視点のなかで、このできごとは日本の歴史を考える素材となると思われる。

唐が解体したことで、これを取り巻く周辺諸民族

の興亡も顕著となる。構図で簡略化すると、①唐→宋、②新羅→高麗、③渤海→契丹(遼)、④南詔→大理と整理できる。①を軸に、②は朝鮮半島、③は東北(満洲)地域、④は華南からインドシナ方面となる。わが国は平安中期に当たり、旧来の中国(唐)をお手本とした律令国家にも変容がもたらされた。よく知られている平将門・藤原純友の東西の兵乱も、大陸における政治権力の変化と無関係ではなかった。

その点とはともかく、11世紀初頭の女真族による侵攻も、長期的な流れでいえば、10世紀での東アジアの政治動向と深く関係した。ツングース系とされた女真(女直)は半農・半牧を営み、おもに中国東北地方の東部の松花江中流域一帯に住んでいた。10世紀に契丹(遼)の建国後、女真族はその支配下にあった。女真は契丹への服属以前、渤海の支配下にあったとされる。また女真族は拠点の広域性から、かつての新羅や新興の高麗の領域内にも居住していた。11世紀にわが国に侵攻した勢力は、そうした女真勢力のうち、朝鮮半島の東北沿岸に居住する東女真とされる。

ちなみに女真を指す「刀伊」の表記は、「東夷」の音を「刀伊」に当てたもので、異域・近境の人々の称と解されている。この女真海賊の被害は、高麗も大きかった。「内海」的性格を有した日本海は、高麗、そして日本、さらに女真の活動の場でもあった。高麗建国以前、わが国は9世紀後半から新羅海賊の侵攻に悩まされており、平安期の日本にとって、北九州沿岸を含む海防問題は、大きな課題だった。

いずれにしても、女真族の進攻事件は大陸との政治的変動とリンクしており、新興の契丹そして高麗

両国での圧迫のなかで、その活路を海に求めたことで勃発した事件だった。

事件の経過

この事件のあらましは、『朝野群載』『小右記』などの史料からその全容がわかる。1019(寛仁3)年3月末から約2週間にわたり、女真族が50余艘で対馬・壱岐に来襲、その後、島民たちを殺掠、筑前国(福岡県)の怡土・志摩・早良諸郡を侵略、博多に上陸することになった。その折、後述する大宰府と北九州諸郡の兵、武者たちの活躍もあって、かろうじて女真族を撃退した。

- 以下、事件の経過について整理すると、
- 3月28日：刀伊軍、対馬・壱岐に来襲
 - 4月7日：対馬・壱岐両島を攻略後、越前国怡土・志摩・早良3郡に侵入
 - 4月8日：那珂郡能古島を攻略、同島に刀伊軍が布陣
 - 4月9日：刀伊軍、博多警固所を襲撃
 - 4月12日：刀伊軍、志摩郡沿岸を攻略
 - 4月13日：刀伊軍、肥前国松浦郡を侵し退去となる。

上記のような経過をたどった事件の情報が中央政府にもたらされたのは、刀伊軍退去後の4月17日のことだった。中央政府の対応について、簡単に整理すると、

- 4月17日：大宰府から事件を知らせる7日および8日付の使者があいついで京都に到着
- 4月18日：内裏で公卿による対策会議
- 4月21日：伊勢大神宮以下の諸社に奉幣使
- 4月25日：16日付の大宰府解状が到着

4月27日：刀伊戦防衛の官符を大宰府にくだすとともに、天王寺に修法をおこなわせ、兵糧および平氏派遣の準備をさせるとなる。

『小右記』その他の史料によれば、日本を退去した刀伊軍は、朝鮮半島の元山沖で高麗水軍により壊滅させられたことが知られる(『小右記』寛仁3年8月20日条)。その後、9月には刀伊軍の捕虜となった270余人が高麗側の尽力で対馬に送還されたという。後日の報告によれば、この事件では、人間と牛馬の被害が大きく、侵攻された諸地域での殺害364人、捕虜1289人、牛馬380頭におよんだとされる。なお、地域ごとにわかっている被害状況の内訳としては、表1の通りである。

結果と意義

異賊侵攻の報告に接するや、都の貴族たちは神仏への祈願に力を尽くした。9世紀末以来、新羅海賊に悩まされていたため、100余年後に勃発したこの事件も、その延長との認識だったからだ。けれども、その被害ははるかに甚大だった。律令軍団制が解体していた当時、刀伊軍への軍事的対応は大宰府を中心とした武力によってなされた。その方法はどのようなものだったのか。

この点を深く掘る下げるとは、古代から中世移行期の軍制の転換を考える材料ともなる。当時の武力発動については、前述の『小右記』以外にも、有名な『大鏡』などからもうかがえる。かつての新羅海賊との戦いは、国司・郡司の官人たちが、農民を中心とした軍団兵士たちを指揮し迎撃した。けれども、この刀伊事件では、限定された選ばれた武力が機能したことがわかる。

表1 刀伊事件による被害状況(『大宰府市史』より作成)

		殺害	捕虜	牛馬	備考
筑前国	志摩郡	112人	435人	74疋頭	
	早良郡	19人	44人	19疋頭	
	怡土郡	49人	216人	33疋頭	
	能古郡	9人	0人	68疋頭	
壱岐島		148人	239人		守藤原理忠、殺害される。遺留の人民35人という。
対馬島		18人	116人		銀穴焼損の被害もあり。そのほか焼失した住宅45棟、切り食された牛馬199疋頭とあり。
	上県郡	9人	132人		
	下県郡	9人	98人		

10世紀以降、各地で紛争や反乱が頻発すると、律令軍団システムにかわり、「兵」(ツワモノ)と呼ばれた武力保持者が注目されるようになる。彼らの多くは王臣の末裔も少なくなく、また天慶の乱での武功者(平貞盛・藤原秀郷・源経基)の子孫もいた。その武功者たちは五位の位階を与えられ、武力を保持し、「軍事貴族」と呼称された。地方の名士として彼らのなかには、都と地方を往来(「都鄙往還」)するなどの勢力もいた。徴兵制を前提とした律令軍団制のなかで、武力の請負化が進むようになる。彼らこそが、その後の中世社会の主役となる武士の前身をなした。当時「兵」あるいは「武者」とも呼ばれた彼らは、都では摂関家以下の権門に武的に奉仕したりした。

刀伊軍での迎撃で大きな役割を果たしたのが、彼らのような「兵」「武者」の勢力だった。『小右記』によれば、大宰府軍の主軸をなしたのは、出自が明確な「ヤムコトナキ武者」(「無止武者」)とされた勢力だった。論功行賞で中央に報告された武功者には、平為賢・平致行などの将門の乱での功臣の末裔たち、さらには大蔵種材など純友の乱の「武者種胤」(武者の血筋)の人々も多く活躍している。彼らは中央権門と人的チャンネルを保ち、地方での勢力基盤の拡大にも関わった。

刀伊軍の撃退に尽力した人々には、「無止武者」グループとは別に、筑前や肥前など諸郡で活躍した「郡住人」のグループもいた。こうした選ばれた武力を駆使することで、刀伊軍を撃退することが可能となった。加えて、当時、大宰府軍の軍事的指揮をとった、摂関家出身で武闘派貴族の藤原隆家の存在も大きかった。彼は刀伊事件勃発の5年ほど前に、眼病療治のため大宰府に下向していた。

隆家という中央貴族の指示の下で、「無止武者」とこれをおぎなう「郡住人」の連合軍がたくみに力を発揮して、海防の危機に貢献したといえる。その点では、この異賊侵攻の事件は、中世武士団が本格的に登場する以前の軍事発動のあり方を考えるポイントを示してくれる。

刀伊事件の余話

最後に授業に際しての余話も紹介しておきたい。それは捕虜とされた庶民の声だ。詳しい内容は拙著『刀伊の入寇』(中公新書、2021年)をお読みいただ

きたいが、対馬の在庁官人長峯諸近なる人物の高麗渡海の記録が『小右記』に紹介されている。それによると、彼は対馬で刀伊軍船に拉致された妻子をさがすべく、みずからも単独で刀伊の軍船を脱出して、小船をこぎ高麗におもむいたという。妻子の行方をたずね各地をさがした結果、彼の母を含め妻子は刀伊軍が日本からの撤退の帰路、高麗水軍に撃退された折、多くの日本人とともに海に投ぜられたことが判明する。家族への情愛もむなしく彼は失意のなか、対馬へと帰ることになる。その折、官人氣質も働き、高麗国に頼み、無断渡海の弁明のために捕虜とされた人々も証人として帰国する。『小右記』には、その諸近とともに捕らえられた二人の女性の証言もみえており、高麗水軍と刀伊軍の激戦の様子もうかがえる。庶民の生の声という点では、大いに興味をそえられる内容といえる。

刀伊事件が東アジアの政治変動と無関係ではなかったこと、さらにこの事件は律令国家から王朝国家の転換を軍制分野の素材ともなりうること。こうした大局的観点とは別に、庶民の声を聴く貴重な素材ともなることにも留意したい。

(せき・ゆきひこ／元日本大学教授)